へ13
3104
4

席上奇観垣根草四之巻

小櫻奇縁によりて貴子をうむ事

大和の国高市の郡に小野兵衛といふものあり。代々農家にて家富さかへ一郷の長たる家なりし。是が子に忠通明といふあり。幼より御堂殿に宮仕して諸大夫たり。父の兵衛身まかりて後は故郷に帰りて橘の何某が娘をめとりて父の業をはげみ、の礼節に身をとゞめ、かんより村郷の活計天分を全くする事を楽とする。こひ善しき孫に家事をゆずるまで一子もなし。明暮これをなげきて乃祐氏のなつかしきもわき子といふ事を祈るに其しるしなく。誠や者る本より花さく大悲の光をなど頼みのなき事と夫婦ともに初瀬寺の観世音に一七日不断しけるに、いつとなく身ごもり御懐妊ありて妙なる御示現にて、此子は清水の花見の時に有縁ありてかくこそ

門 へ 13 號 3104 巻 4

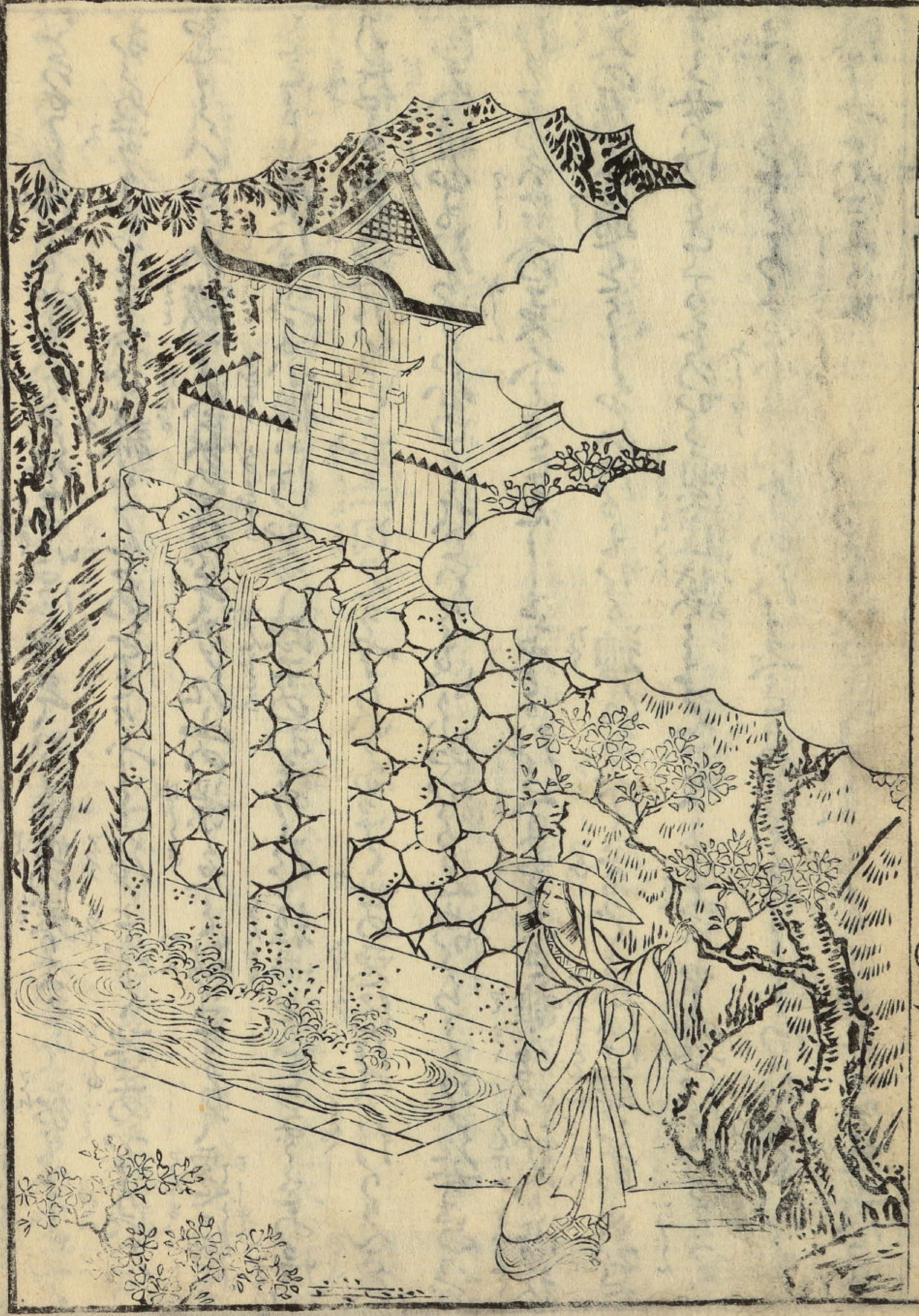
昭和九年七月二三日 購求

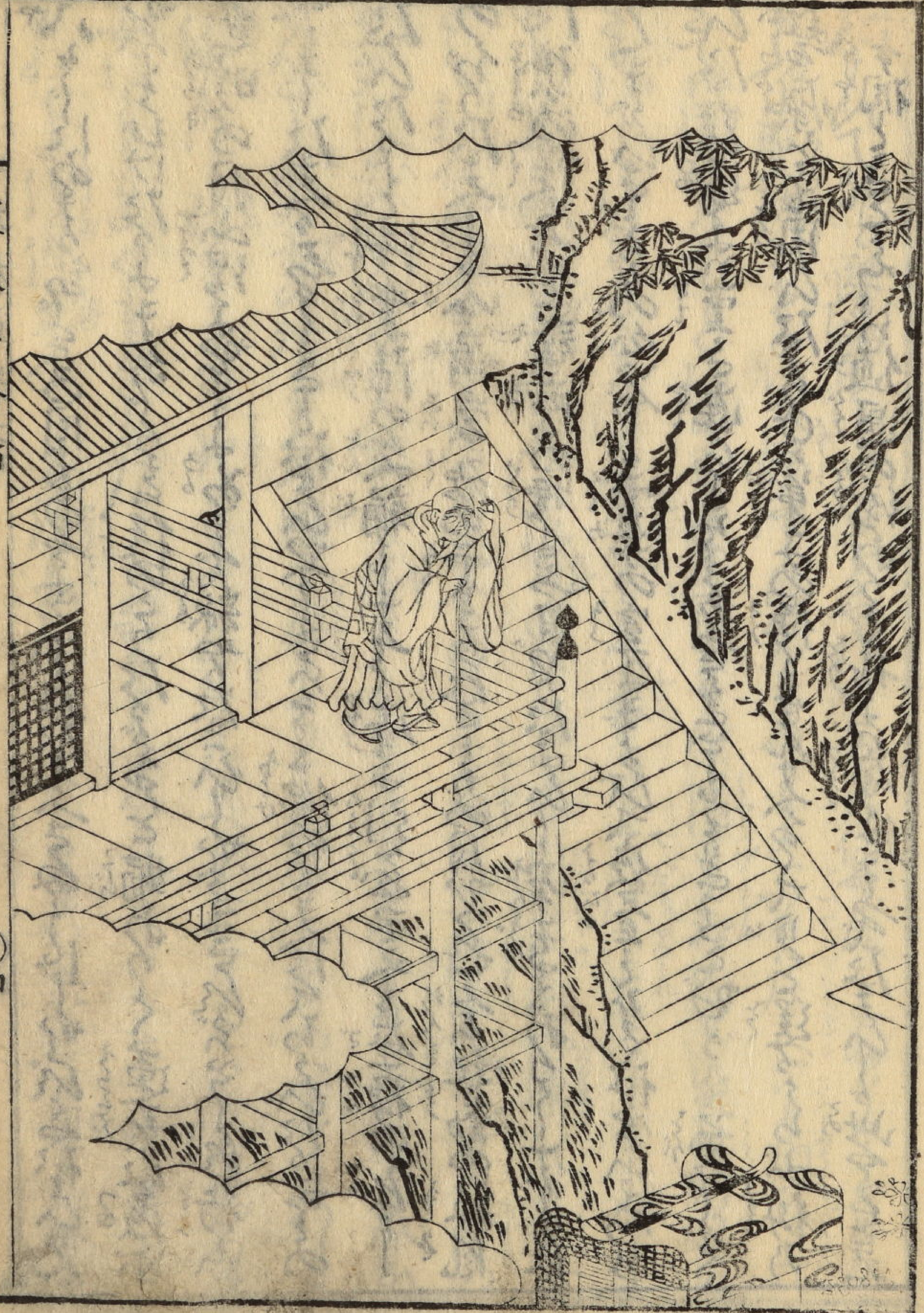
詣でよかしと夢に見えて其感應のむなしからざるをよろこびて佛のた
しくにまうで都に歸りて求男求女のちかひ心願不空の誓は
たがはせ給はずとはいよいよたのもしく一七日に詣る七日満る暁に御
まぼろしを見しより童子一人来りて手に持たる白蓮一枝をさづけ給ふ
やがて妻が枕のほとりにおきて寝殿に入ると見て夢さめぬ其日より妻
にはらみて一女子を誕生頼むかひありて月満て下向ありけるに
いくほどなくたゞならぬ身となりて十月満て女子をうみければ夫婦のよろこびたとへん
かたなしやがて白蓮の瑞によりて小蓮と名づけて珊瑚とも愛しそだて
けるに成長するにしたがひて天性の艶色玉のごとくかざりなき
ありさまにて父母の愛いふばかりなく隣の者も其國の人もほめ
ざるはなし齢すでに十四五の月にかげのわかれ葉末の露も

其頃同じ一族の中に河邊三郎右衛門といふものあり其子をとてからに入て家をつ
がんと争ひて仲人をもて夫婦に求めけれども一族といひ行末のたのみ
なきにはあらねど彼は世々の名代なれば其子のなきにむかへんと許さず
世にある人は老らくのなぐさめに此世をかるにわかに嫁せんとて
より年に一度づゝ参りても今年の贄妓を嶽に争ひを生ずる事あり
都より出すべき宮仕させて早く是をとゞむる便の計ひなすべし其人
玉を磨きて埋もれてかくる身のさいはひも老らくの幸なりと思はれ
おぼえ候ふとて是取立て都よりの出世時の関白家に宮仕させける郡代を
ちかく河邊三郎右衛門も遺恨をふくみて力をえず小蓮は天性の
野路の梅が枝を御園にうつしたるごとく世にすぐれたる宮仕の勤も
をさをさすぐれてよく世の人並にはまさりければ政所の御いつくしみ深く

頃しも立かへる春のはじめ弥生の空とは柳桜の錦をしける都のみならず
さかりなるに大宮人のいとまありげにて花に心をよせつゝ行る
関白家の政不束なるによりて将軍といふも名のみにて地主の桜をとよせて東洛
東南よりこゝらせめぐりて中門はさしもせで政所とぞいへる女房達よりて
ほどん袖をほころばせて幕をはり一結の紐を宝の羹ぞたのしからぬ
まつりかくとて花の木のもとにまどゐしつゝ其頃洛水のほとりに年久しく結
まじはる世を雲の上にながめたる親しき後も辞してむかし叡山横川の
学匠にて智淵法師と申せし僧都もたまへりしかど公家の縁
を辞して後は山の草庵にて御ぐしおろしかどもけがれたる花園をいでゝそれと離れ
てたまへありしかど後世の菩提を祈るとてたよりし弟子の僧にたのみ
あらぬ男も他事もなく唯法華読誦の外は大悲の宝号を念じて

とらせず野も山も花さかりの鶯の鳴にいでゝ見れば世の春はなべてかはらぬに
かゝる世にありてたれも詠せんとのみ思ひつゝ席を出て地主の桜にたち
やすらひなまし誠や人家の者ぞかれ山の景色と枝にすがりて遊境の主
をとこし居たまへる不思儀の行状政所の女房たちにのぞみて短冊をとりて
の枝にかけたるを聖一国師の御ことばに世の悪縁にて作りたる
恋の人道もならず心のまことにいはふやかくるとめがたきうち一女を勧
あるじの吉祥宜人ところ離欲の仙人が常に
心の床に通ふともかゝる類ひなど不浄観の前に
する女はけがれたるものかは煩悩にまよひて女にくるしみなん
れ行きの中にこそ不浄の念のたよりあるべからずかへりて
なまじ小ざかしき人のしわざをかゞみたる結縁せんとて





やへぎくにおすするをぐらの月をわすれたまはんとさえありけりかくれにたまひなん
かみをむけなるまるかぐらる桜ろのちたるがゆゑと媚わろく蓮台にて往生
き曉の月山端よかすまするめまで詠ずなるひとかざるさんだうそう行んへ
すまうたまへる志しては極ひて天へるとをそる佛のをまへにてちうへなるまての
たびひたるまと浄業陰の文誦じまて唐よ引籠つて又も座禅の体よう
のがりたまへども弥陀の雲さきうをの月かくれ一念起動の波風
に梵の膝ろき護摩の煙よさおかりなれし念ざるもあうしすぐれ
てんすがへこうものの宮も雲井の宮さすまらひて夜草となくたとひてかつ
ひたはふ逢はれ方さ病ふまへくうこまさだきもかすうとうかすらしくなりしく
醫藥とも用ひなるけが弟子なる僧をせんすべなくて日を送るうち山科の
宇桐とるこうんへ値遇の縁わろく北政所よまうぞなれ火が世らどん

たまひてなど醫師どもゆんさぐりや御くすり侍らんとさまざまになぐさめた
まふ聖挽とをさげて涙ぐみにおはしまりとかくてありたまへば宇桐殿それ
さて道心乃いと深くおはさまさげきまんと陰陽神のつざれ社倍らるち
さるにても御心とやらんどもう之毒をとるとて毒となる方便下宮ともひやだし
かく其日の花見車と共に身をなへがぞ関白家の御車にそその女
こそ新命婦小ざくらとかしこよりてそのあの宇桐あるべくとも御逢ありて貴さある
まの母人に本の母けてまさんいろんも浅ましくもそこととそ本母とさらなん
ちんで風の家の燈さんぬ間に一なさてうまへなまでそこのなえてすわきさ
縁にも侍るまじおどろせせゆそいとひ送るなまへが小ざくらとやまうりなある
女にくうるえてくるさるるえんたまでそのかうそくまんりてさうそやさみんといてまえおく
るおしとてなべて身まよそろ添忿なまるし女そてまつのたまひ男となる女よ

案門を去やつて出ぞるの枕のかたはらにちかく居まゐて此ほどの御ことゝもを
たかきも自也とさとりて御身もおなじもの罪なき身をおなく一夜をさまろ
にさとりたまひし御仏をうちしめしたまふとのあさましきさまをかたりても世
いかなる御つゆん文宗の世のやさ縁とも照したまふ覚さかづ々のまみへとも御縁
のうらみたまひし事をゆかしきと仏をまへて仰おほせをもちゐて御念仏をとなへ
さもんなりとしてなん尤耳すきて仰かし給ふことなりしにて聖徳をあたへてさら
ば念仏三昧読誦の功にまさりたる法華十万部の寂よる功徳とのたまひなく
譲り給へるもの此世にいまし人は駒とう男子をまふけなまちで摂政関白となし
や出家させたまひて僧正僧都姫君など女御更衣是あんなると教させ
かくそ弟子の僧よ出家とふかしからて
多年愛養菩提樹　留遇人間第一春

二句と作りて吟じ終りて座をたち掌を合せて繞りてまゐらせたまふ小桜とぞ
なつけ兩宮あはれとやおぼしけん其中皇后は宮仕の身なりければ
公けなれ共その事を頼まれ給ひて山科なる茶昆の縁をたよりつ住せ給ふ
給ひ山よりしばしば供養させて供養しなまよ小桜も折々まゐりて其ゆかりとぞ
ながめ給ふあるの一宇の伽藍をたてまつらんと祈らせ給ふが程なく宇治殿より
給ひける君達姫君数人出生ありて深かりし事ども聖のことば露
たがはず栄えて爵位昇進なりければそれより小桜宇治
殿の御寺をまうけて一字を建立し如意山普門寺となづけ
奥福寺の千覚律師供養の導師にたゝせ給ひ斯かくぞ世に名を残し
てたる伽藍なれば近き頃までは東山に其舊趾残りしとぞ
山科が子孫九世間居して其字と守るまで

中昔江州守山村に庄司といふものあり代々酒を醸して酒職を営みける
く家富さかえたり庄司生質人となり慈悲ありくすこしの才覚もありければ一箇
の癖ありてまがなすれば不測の禍を引出せり其病根は短慮性急にして流恩
貴くありけるとあれやまたは閑静を罵りてなぶらば世の酒気と書る
時は丈の志に従をぞくぐに人会まで折をもて遂に及ばずしてありけれ
を諸の民をも瀬ひて酒乱せ八分にして至るに及て家はかへる門に人多く
集りて何事やとうるさく著顔とえる老丈は庄屋家の佣
と論じけるに遂に詞あらく成て争ひかゝる庄司たちまち利害をさし
せしも老丈却て悪口なりければ酒狂の庄司猶怒の志盛にして
かれを論ずるまもなく軽々く老丈をあしらひ何くへか因縁して家を
路て家内は皆以て騒動して用事に乱思ひ帰りて有無の問ひかける

庄司もこの時に臨て酒気忽ち醒て初て追悔慚悩すれどもかひなく隣乃
人々を招く計策さへなくすこしの気を失ひし目を回してありしとぞ
てなみに耗ありと云老丈平生瘠せ衰へたれば打ちに堪へかね須臾ありて
平復することを常のごとしかかる煩ひとみえて初に似ず懇懃に
謝するに庄司とても家内の者の薪をもて酒飯をあつらへて持て参る
一足を出で主人の短慮なるをとくと謝して老丈銭なども辞して帰りけり
さかんに其顔色面に現れて此時すでに二更の頃なり家内
よりて斧鉞を負ひて喜び且は庄司が軽率を諫て所存を伸ける
なれども頃頼に意をたく者あり誰しもいれば野須川の辺るほどに行けるが
一丈余の年あり主人は家に目しなりて庄司郭て一間に出たり
は後ち色ある物を出で見るん見知たる者には打ちまかせずける

に要人なる仰なる庄司あやしみてこれを見るに浪ちるたるの人とおもひげ
てちかく居るに今夜二更の頃例の菖蒲を売る女門を浪らんとするを
求めけ流して闇に紛れ窃かに跡をつけてさぬくひてまちよりて察
出来て其夜今日しも山村の林に行くにまた倚りかかりて樹のかげの
痛くともこらへ何かして門を出て堤の小路に背の痛堪へがたく
字あまりてあらでは一歩もすすむこともかなはず船の上に乗せて情ある
余る事でも老父生国は近江国の産なる山里の者にて妻子を持ちまた庄
此うし傳へたる事にて老父が非命にすぐるまじきとこそ存じられし鏡の
宿まで来たりおもふても付きまとひし咳嗽せまりて途にとり
ぬ此年に至りて一大事の来たれる恐れの過ぎて彼等にある故に密かに語りければ
かくなりし故に庄司丸雷頭の人によりかかるごとく面を並べて送りて

ふるひて浪ちるが婦言を謝し後々の方便をもなさむ浪ちるも起て密かに往きて
此事咄す事に似て寧ろ今宵二更人の来る所を死骸と夜あけてえさせよ
むかしに葬りたるに雑人の影跡をもつてあやしきことなかりけん
に庄司大いに喜びて其方の苦労すること一人の身に及ぶは忍びがたし此浪人の妻子を
及ぶまじ一門の辱一郷の禍と成るべしされば葬りて後その
事を報ずべしとて金子弐拾両を出して謝儀として浪ちる従不満力を
あらそひて別に白銀拾枚をもつて酒飯の料として浪ちるにあたへて是を
納めさせ又三人の助力を得る事一人にて夜中に来り身を帯びかくして夜あけ
ならば人目をしのびかくして家にかへりさりげなく家に入りしとぞ子も
同じくうるはしき者ありし事を喜びて始末を語りて浪ちるに謝して去りぬ
庄司は徐にやがて一時の経を払ひ不測の禍をのがれんとせしとぞいへば浪ちるも

周七が音信と絶て居たるに天明にいたりて帰りて死骸を門よりおろし置
に埋し葛籠のいりたる紙統(?)をたづさへ帰りてかたづけんとするを
たづね来て安心して周七をも限りなきとおもひて其方を償ひ又ある庄司は
しらで彼等の癖を慎(?)を恐の一字をもちひて家内の者も亂(?)質の者なりける
とおもふに周七を帰りて家の子として定まりにあたりたる者もあらざれど其母を
もひらかなはりけて恩顧の者よこれなき悪不敬の行ひも有ましけれども
庄司は從はで久しく此悪者の者に切りて庄司が最愛の妻前載(?)に
出ておよびなからも周七も出来りておよび居たりしを庄司は打擲(?)なしてこれを
みて不良の者あらんとて周七を勘当す相擁の前に其の者の痼疾一時に
発して体も怒り又ぞ即時に家を追出せる周七は其実の事を語れ
ども妾の手によりたりけるゆゑ日頃の悪事十倍して罪を犯して

遂に家を出ぬ周七憤りにたへず夜中ひそかに出て庄司が老父を殺し金子
奪ひ去と訴へ膳(?)の紛代されて庄司が家に捕吏を伴ひ庄司が家にありて暇
傳を聚(?)捲し居たりけるに俄かに捕吏数人入来りて公の命なりとて
其党いふは子孫をも罪状とともに其の有無を公廨にさそて決んべしとぞ
一條の縄索に縛りて追立さる家内の者は其来歴を志らざれば偶(?)来り
なりと號哭すれども叶はず公庁にて庄司を吟味ありしに紛代
其家内老父を打殺し其を紀す庄司窃に露ありし(?)ちにても其の
實を申せと陳を紛代せられて周七をなで殺せし者を志らなければ庄司
其周七が新たるを(?)さまりて陳(?)ずつき拷問せられて罪に伏せ紛
代まは命じて庄司を獄に繋し周七をも捜索せしむる沙汰を発する
に其身徳つきたる娘(?)れ行ゑへ行方をさらば子役者老父が生(?)関をとる

さらば上罪も文のぎんみにおよばず、捕へてしまへ四方念仏を追捕せし
むる庄司殿より日夜呵責して、再生のよろこびを喜ばれども、人を殺せし
律義者のかくなりたるを見て念仏誦経して、喪を形のやうにすまし、家財
ある妻子は従兄弟の所へ預けて、身はさすらひの一族、家の子に至るまで
脱路を商議するにも、五万石の守一生のたのみもおしまれ、当時の郡代が子
し[illegible]理非明白にして賄賂をとらず、いかなるもの世に出て、伸てわが身の為
と貧欲を[illegible]、人をして年来の日の餘所ながら、失悪をいたし[illegible]
以て[illegible]の人をもつて、それより手に入れ、妻子をつれて家の子
まで[illegible]、神を祈りて脱路を乞ひ、五三日をかさねて、兼ての
善事の志を著莪と名付て、門口に入り[illegible]の白目に[illegible]
ゆへにおそれ、[illegible]子に先立たれて、門に入て[illegible]

[illegible]を謝し、著莪一人を出して、さしもの家門の[illegible]
あらざるまでも知るべき事とて、表向の[illegible]て、望を[illegible]
を[illegible]て[illegible]と謝せんため[illegible]
の罪に陥りたる娘事とかくするに、老夫を招て大事を問ふ[illegible]
まうけ[illegible]主人のために[illegible]の罪と[illegible]妻子に
ところ[illegible]、五月雨の晴間に日をとりて[illegible]の森[illegible]
さながら[illegible]下向に[illegible]新たに[illegible]妻
[illegible]先ず[illegible]酒家を出て野須の[illegible]
二里[illegible]往来の旅人[illegible]の[illegible]
かの庄司殿の家にて[illegible]
[illegible]その[illegible]を買んと求む。先[illegible]身[illegible]

價とえぞや鳥目を費すに代て譲り受渡る又云着顔といふ事あり
貌を永用ゆる者わのごときまと貴ぶんとすむ者わさ錢を持出んよりは
今むぞてくわえぞかくへの此二両と以て變ちて作りたる丹淫なきに又
に於代無家でやくより千間盤討のわるべきとさゆるへ追捕と厳にし
て頃日淫ちと捕へえてりとそ淫ちと云ことに淫ちる者も上に於てさ
陳べてさらぬへ丹淫を以て庄司と誣たるよし罪は体を於代かまて
云海がのこさ葬りたる九難へいかして無ぞ者てる淫ちる千夜にもよ
て淵がのもの流れ本多くあわずへ人の尋ね来る事とまうし延るも其者が
そのうちは知ぞくさこそ其かくいへるといふは埋たる難と発掘て再び
立てらぬにやうしと行するもさへども正しく淵がの者なり於代一くの罪を
免て判て云淫ちる首悪ぞるとと論ずへくされども人を害せの伴ちれ

さればその罪を贖ふるをとらんぞ死刑一等を減じて市にさらし
てしく三日にして鬼鼻が鳴りを流すべし周七主人の悪を發のぞなら
ず讒りて妄誣の罪に陥さんとし況や庄司害すを助成たる縁
て厚く待するとや海が罪甚大なり庄司の門前にさらして三日にしく
梟首すべし庄司罪なきを汝これを知る海が性急より起りて一意
に許殺したると知て盗り埋と手上を誣る罪あり過料として旨
国指定まと出ずべし又周七が罪にくさべしとども彼を追手は海が性
急にて罪の虚実を糺ぜざるより出るまゞた也彼が母終身の扶助海さ
しまさんべく母たるとの罪あくまて海が家よりさきのありしく哀
あぐしそまその数討をとらんで轉買しなるとども厚意を以て遂
ぐたる布を実途にて責するより起り況やまして海が過言より庄司が

歎無庵鍼砭の妙道を得たる事

むかしより鍼砭の妙術は紀元四生の功あり脈絡の會湯液のをよばざる所を

愈すにあることは遠攻神のごとし傳記の載するところ女かくれ李洞玄

龐安時頼は其聖と云べし北条時頼の時に歎無庵としてその異人

達して其術を傳へしより往々不測の功ありて其名高く著れたる

陵家の孕婦數日産するに能ずして分娩せず歎無庵云四人既に胎を生ずと人

どもは母の腸を執へて放ざる時を經ば母子ともに死すべし術をもつて四肢

その手にあたるを抑て虎口に鍼を以てすを縮めてすなはち生る四の虎口

して鍼痕あり誠に一時の権六百四十九穴の外にあづかる常理をひく

論ずべからず其頃時頼の愛妾久しく中風のごとくにて諸醫をまねけども

効なし歎無庵を召て視せしむ歎無庵云是邪癪の湯薬など

怒を引出しければ發なる獅子の死骸を攻喪する労ハ海とまさるとも

とも下一人の争ひかくてこそやかまし庄司また家内かきと争ひたる奴

を置して助けしむべし經重咽句に変動ありて各其罪に依りて庄司

不測の禍を生じてすなはちかぎりなし寿も悲ぞして来るぞる時ハ一縁の至路

をあやぶりなれ短世より云へるの禍端とつらなりしかと滅ぼす忍の字を

保得ますれば遂に二の忍の字をかけて短世の疾を療じて子孫にひさしくつぎ

を守りしむ其子孫連綿として九世とゐて同居して家業富榮なる國の

ちまいりて国土にいふも教ありて家をたもちて家業をもちるとにのみなき

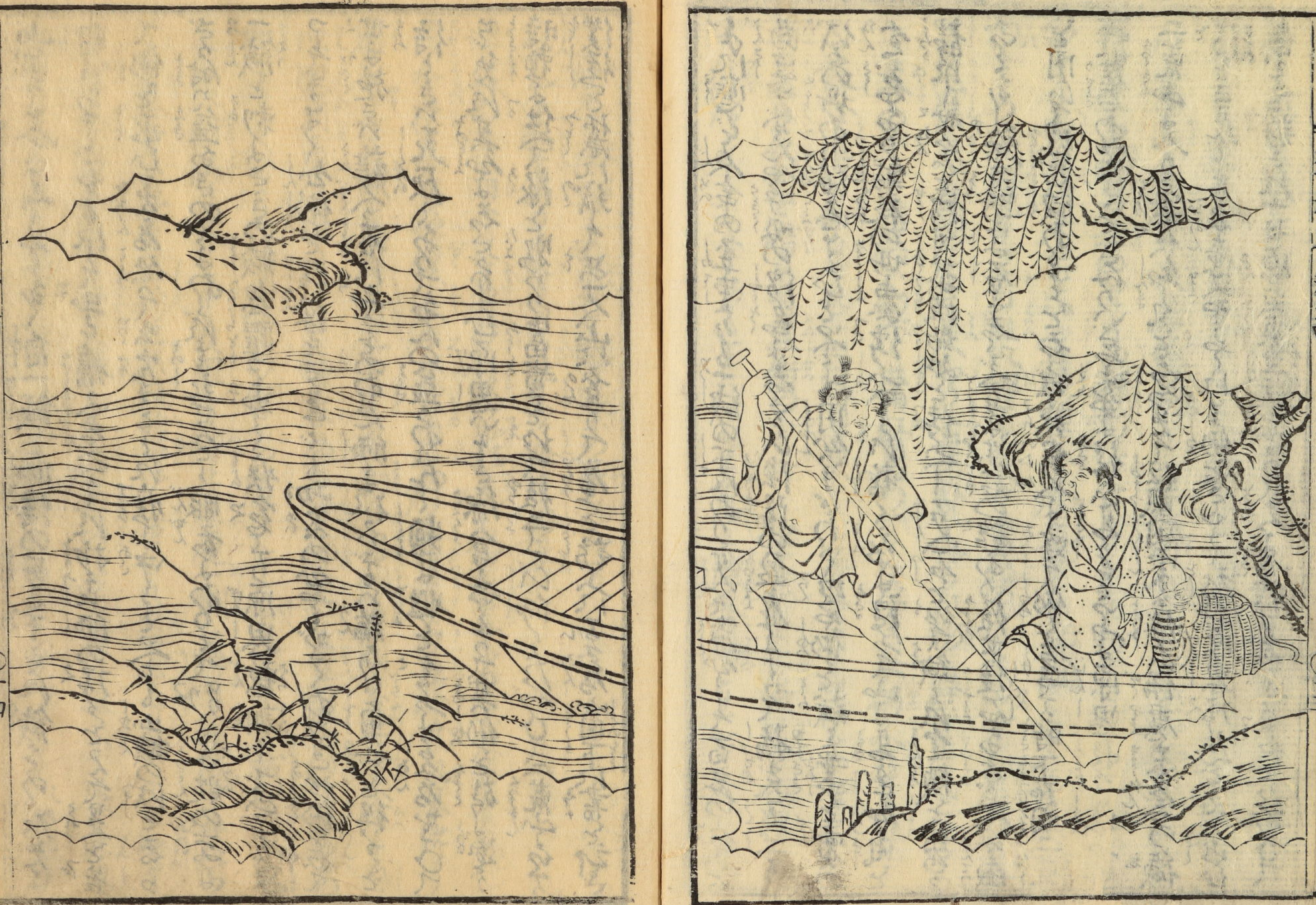
世々忍の字を守りていとすれバこれ国も感じなりて縁百把を賜ま

ひしとぞ今の世までも其子孫のとりて傳へて守る日本への字へ傳り

誠に過とおもいろそかしと思ふ聖のもとへむかしからあるとや

百日ばかりにて鍼を出して其足踝上三寸ばかりを刺せば暫くありて婦人醒覚ん
するがごとくにて元気力常にことならず此病起る日より二人の旺盛来し
たる男来りて城外又は山林の間に誘ひ行く今日しも伴はれて行ぬ
ほどなく彼男路のかたへの棘刺に足をさゝれて動くこともあたはずなりぬ此家の
主人これを聞て時頼が如く夢に見て其術をもつて病を治せしといふ
ありしが人皆是を奇怪に思へども百邪の出所なる十三処あり鬼
宮鬼信鬼塁のごとき是なり世の医ぞかし術を試て生民を傷る
こと斧のごとく百邪ぞ刺べし庸医のおよばざる所なり家術は旋にあらず
こと人皆術に妙なることを信じ業を学ぶ者甚多しされども全く原思
ならぬ日夜心を潜めて其術の奥妙を極めんことを求む術の極を
以て得たるものとてまたくいまだ其藏の術をさとる意にあらず

手に應じて人命の至重なる三藏の下にありけんで奔走して百年の命をと
断運又は呼吸の法をもてさらに陰陽の盈虚によりて指尖より
代々の妙あり治法をなすといへども用ひざるなく況や術を試み業とする者の
命を害する鍼砭の妙處傳ふべしと轄く家に隱れて山に入りなんと
靜に世念を絶して其儘妙処を傳へ古人石を以て鍼となし鐵を用ひる
ことあり此碑の字石に古くより古き石の碑あり後世佳石をさがし得て鍼
を用ひて後石藏あることを知る家異人に逢て術を受る時下野國二荒
山に佳石あることをきゝ是を求て原思嘆て後に
二荒山に入り晝夜心を尽して松風閑雲を伴の俗慮妄念の織
ちることなく又やすくして佛とさかしき原思ありとて又ぞ求め
得ず一日原思暴疾に罹りて大に悩む又僮は石をたづねて



山窟に入てすべき手なく自一鍼を師傳の所に下され鍼をのたなみに
留めらるゝのみにて少も痛みを覚ざれば折々師の許にとひて是を告
て術を求む万安笑て云汝また是に伴ふと云ども出鍼の法を知ら
ざる時は益なきのみならず忽ち死せんと眼前にありて別に手腕の妙によ
る一鍼を刺にさきの鍼忽ち躍て出疾忽ち原思甦謝して止にとゞま
りてますます此術を精練すといへども功名の心なかりしかば此術を以て
世に施さず雖人の右に出るものあれば師にならひて論なり奥妙を得ると
何とも死灰となりてあるの益あらんと頓に暇をこひて万安が許を出て
家にかへらんと原思いそぎ鎌倉にかへりて其術を施し遂ふ
時頼に仕へて禄を賜り富貴を得て後二十年師を慕ひて再び荒山に至り
僕従と嫁康に残し只一人山に登りて庵を訪へば万安窓下に書をよむ

て座せり原思その恩を謝し業の成就せしことを語る万安云吾も稀なる
人家に病者ありて今日こゝに来る汝が術を試べしと云所に隣家より
嫗僕あまた負て来る扶て座せしむ家主の妻なり原思診てこれを
こゝろへる嫗僕ら家の者あはれむ妻又疾発して気息絶たり
通ぜざる鍼を出して其穴を定めて刺に忽ち悶絶して息絶んと足をさすり
原思周章て過しを悔万安云汝が術かくのごとくに其法を以て応変の
妙を知らざれば世の人をあやまる事あるべしと誡めて原思
支躰に汗流て暫くありて罪を謝す万安一鍼を臍下一寸に下してたち
まち息出て死ゝや穏なる其後嫗僕に命じて家にかへし其三日を経る
あるくことなきに至るまで肩雲に技業て得る原思
妻ありてこれを好んで手を引て歩行まで尋んとすることのごとくに稀なり

下つゝく行方をしらざれば原思益師のなげくべくもなくして此人をし世に出ば
家術は白日の蛍火なるべしさてこそ初て後の禍を拂はんとはかりごとを定め
なりと髪落一大石を指して云汝試に此石をさして術を施すべしといはる
原思おゝいに恐ひおもふところに其ことを刺ば鍼をもてすべからず思庵云術をさ
時は鐵石も刺べし病人のごときをや術を試むるに堅石をさすごとくせよされば
用ゆ祖なる鍼砭をもて穴を得ればその経を刺すごとしさやうにすれば起死の功を
なすべしずんば試には薄術をもて汝が心病を療せんと仮石を一段
磨するごとく暫くして一鍼を下されし鍼は尾ざし水に没しぬるがごとくなりし
を石忽ちに分れ去りぬ髪庵中より入ると見え石合してもとのごとし
鍼穴のところより髪落面を顕し汝家に帰りて富貴となりしめ鍼は
石室の中に留めやすけれども汝が累となる日あらんや後患をかへるまじくして

かく云て鍼を下すまで心中の計策をうしなひたりしを慚愧するにおよばずして
あし原思その得道の人なる事をしらずして初めて後悔すといへどもせん
すべなく家にかへりて其妻の起居をとふに原思山に登りし日より
病ひをとりて前後をしらず只わのみ山中にいりて醫を求むる君幸
ひに座よりして鍼を下したまひしと答へて其夜をしらず三日を
経て病癒たりとかたるにいよいよ師の得道の異人なるを信じて悦服
しなけりけるぞ其後も時々髪庵を山中にたづねけりといへどもそのあり
遂にその終るところをしらず術の精妙なる神異も侍るからに
を代り無術の庸醫人をあやまる事不学の凡僧士女をまどはして
阿鼻に送るにはげし原思がごとき者にあらずして得べからずその術の妄なる
推て知るべし

席上奇観垣根草四之巻終